『還魂記』における柳夢梅像の設定

根ヶ山　徹

一

明代の嘉靖・萬曆年間は、明初以來、久しく沈滯していた南戯が再び活況を呈し、夥しい數の作品が生み出された時期である。こうした戯曲文學の爛熟期における、最も代表的な劇作家を擧げるならば、やはり湯顯祖を措いて他にはあるまい。

湯顯祖の戯曲には、情を基調とする創作理念が通底しており、しかもその作品が「玉茗堂四夢」と總稱されるごとく、劇中にいずれも夢の場面が取り入れられ、かくてそれまでの戯曲には無い新生面を切り拓き得ているのである。なかでも『還魂記』は、儒教倫理の下に抑壓された男女の情の解放が追求されていること、加えて夢と現實、幽界と現世とを交錯させた巧妙な構成をとり、美麗なる歌辭を用いていることによって、稀代の名品としてひときわ高い評價を得ている。

かくまで名聲を博した『還魂記』も、全篇が湯顯祖の手に成るものではなく、既存の話本を藍本とする。『還魂記』を藍本の話本と比較してみると、主題、登場人物の設定、およびその描寫には、少なからぬ相違點を見出すことができる。とりわけ主人公柳夢梅を、南方に流謫され謫地柳州で死沒した柳宗元の後裔に擬定していること、そしてその柳夢梅が嶺南の地廣東での落魄した生活から脱け出して榮達するまでを描き、いわゆる立身出世譚の側面が新たに附與されていることは、顯著な改變の事例である。しかも『還魂記』が、湯顯祖自身あたかも南方に流謫され、更に官を辭して閒居した時期に構想、執筆されたものであることは、看過できない事實である。[1] このように登場人物の役柄と、執筆當時の作者の境遇とを考え合わせると、湯顯祖が柳夢梅の形象を極めて恣意的に造形したと推測することは、蓋し可能であろう。

さて『還魂記』の藍本は、すでに指摘されるように話本「杜麗娘記」である。[2] この話本は、嘉靖二十五年（一五四一）の進士晁瑮の『寶文堂書目』卷中・子雜類に著錄されており、現在は明末清初に上梓された通俗類書『燕居筆記』に收められるものによって目にすることができる。何大掄編『重刻增補燕居筆記』[3]卷九（下層）の「杜麗娘慕色還魂」、および馮夢龍編『增補批點圖像燕居筆記』[4]卷八・記類の「杜麗娘記」（目錄題は「杜麗娘牡丹亭還魂記」に作る）がすなわちそれである。以下、本論では、版式、說話の收錄情況から、最も古い形を傳えていると思われる何大掄本所收の話本を用いるものとする。[5]

まず人物像の設定について、藍本と『還魂記』とを比較してみるこ

とにする。もちろん『還魂記』は五十五齣に及ぶ長篇の戲曲であり、當然のことながら藍本に大幅な加筆が行われている。從ってここでは、『還魂記』において最も中心的な役割を果たす杜家・柳家の人物について藍本と對照し、相違點を抽き出してみたい。

初めに杜家について、話本では次のように言う。

話說南宋光宗朝間、有箇官陞授廣東南雄府尹。姓杜、名寶、字光輝、進士出身。祖貫山西太原府人、年五十歲。夫人甄氏、年四十二歲。生一男一女、其女年一十六歲、小字麗娘。男年一十二歲、名喚興文。姊弟二人、俱生得美貌清秀。

さて南宋光宗皇帝の御世、陞任して廣東南雄府尹の職を授かった役人がいた。姓を杜、名を寶、字を光輝と言い、進士出身である。本貫は山西太原府で、五十歲。夫人の甄氏は四十二歲。一男一女を儲け、娘は十六歲で幼名を麗娘と言い、息子は十二歲で興文と言った。姊弟二人とも生まれつき美しい容貌を備えていた。

この部分を『還魂記』第三齣「訓女」では次のように改めている。[6]

自家南安太守杜寶、表字子充、乃唐朝杜子美之後。流落巴蜀、年過五旬。想廿歲登科、三年出守、清名惠政、播在人閒。內有夫人甄氏、乃魏朝甄皇后嫡派。此家峨眉山、見世出賢德夫人。單生小女、才貌端妍、喚名麗娘、未議婚配。

それがしは南安太守の杜寶で、字は子充と言い、唐の杜子美の後裔である。巴蜀を流浪して、年も五十歲を越えた。思えば二十歲で進士に合格、地方官として三年を送り、今や我が高潔さと仁政の噂は世に廣まった。內には夫人の甄氏がおり、魏の甄皇后の直系の血筋。甄家は峨眉山に住み、代々賢德の夫人を出している。娘が一人あって、才貌は端正で妍やか、名を麗娘と言い、まだ婚約はしていない。

兩者閒の主な異同は、杜寶の官職が南雄府尹から南安太守に改められ、しかも杜甫の後裔であるというくだりが附け加えられていること、同じように甄氏も魏の甄皇后の嫡派であるとされ、杜麗娘が一人娘と改められていることである。

次に柳家について、まず話本から見てゆくことにする。

且說新府尹、姓柳、名思恩、乃四川成都府人、年四十。夫人何氏、年三十六歲。夫妻恩愛、止生一子、年一十八歲、喚做柳夢梅。因母夢見食梅而有孕、故此爲名。其子學問淵源、琴棋書畫、下筆成文、隨父來南雄府。

ところで（杜寶の後任の）新府尹は、姓を柳、名を思恩と言い、四川成都府の人で、年は四十歲。夫人の何氏は三十六歲。夫婦の恩愛は厚く、ただ一子だけを儲けたのが十八歲になり、柳夢梅と言った。母親が梅を食べるのを夢に見て身籠ったので、こう名づけたのである。夢梅は學問の深奧を極め、琴棋書畫に秀で、筆を下せばたちどころに文章ができあがってしまうほどで、父親に附き隨って南雄府にやって來た。

これが『還魂記』第二齣「言懷」では、次のように改められ、話本とは大そう異なっている。

小生姓柳、名夢梅、表字春卿。原係唐朝柳州司馬柳宗元之後、留家嶺南。父親朝散之職、母親縣君之封。（歎介）所恨俺自小孤單、生事微渺。喜的是今日成人長大、二十過頭、志慧聰明、三場得手。只恨未遭時勢、不免飢寒。（中略）每日情思昏昏、忽然半月之前、做下一夢。夢到一園、梅花樹下、立着箇美人、不長不短、如送如迎。說道「柳生、柳生、遇俺方有姻緣之分、發跡之期。」因

此改名夢梅、春卿爲名。

わたしは姓を柳、名を夢梅、字を春卿と言い、唐の柳州司馬柳宗元の後裔で、嶺南に住みついています。父は朝散大夫の職を授かり、母は縣君に封ぜられていました。［歎くこなし（思い入れ）］恨むらくは、わたしは幼少より一人きりで、やっとのことで暮らしを立てて參りました。喜ばしいことに、今日、成人することができ、年も二十歳を過ぎ、聰明なるが故に鄉試にも合格できました。いかんせん時運にめぐりあわず、飢えと寒さから逃れることができません。（中略）毎日もの思いに耽っておりましたところ、半月ほど前に、ふと夢を見ました。夢の中で花園に行きますと、梅の木の下に美人が立っており、高からず低からぬ背丈、送るがごとく迎えるがごとき素振りでした。その美女は「柳さま、柳さま、わたしにお遇いになりましたからには、婚姻の宿縁、ご榮達のときがございましょう」と言いました。かくて名を夢梅と改め、春卿を字としたのです。

このように、話本において、杜寶の後任として着任した父親とともに南雄に來たとされる柳夢梅は、『還魂記』では、柳宗元の後裔で、嶺南に住みつき、つとに兩親を亡くしたとされ、命名の由來もやがて杜麗娘と結ばれることを暗示したものに改められているのである。

以上の比較對照から、湯顯祖による翻案として顯著なものを簡單にまとめてみると、次の三點を擧げることができよう。第一は、杜寶を杜甫の、甄氏を甄皇后の、そして柳夢梅を柳宗元の後裔に擬定するように、主な登場人物をいずれも歴史上の實在人物と繋がりをもつように設定していること。第二は、柳夢梅の境遇を嶺南での落魄した生活を餘儀なくされているとし、その命名の由來も劇情の展開に密接に關連するように創り換えていること。第三には、杜寶の任地が廣東の南雄から江西の南安に改められているように、舞臺を南安に設定し直していることである。更に『還魂記』全篇を通しての、主人公柳夢梅と杜麗娘の描出の仕方に着目してみると、杜麗娘の形象が基本的には話本の枠組みを逸脱していないのに對して、柳夢梅像にはかなりの質的な改變が施されていることがわかる。つまり、杜麗娘が冥婚譚の一類型である話本からの形象をそのまま繼承しているのに對して、柳夢梅には質的な改變を伴う新たな形象化が圖られていると考えられるのである。

さて從來の『還魂記』研究において、登場人物の形象について論ずる場合、概ねは生死を超越した情の結實というこの劇の主題から、杜麗娘を中心に据えて、儒教倫理の桎梏を超克して個性の覺醒を體現した女性と看做し、そこから『還魂記』を、戀愛至上を謳歌した作品として捉えることに終始しがちであった。かくのごとき見解は、徐朔方氏[7]や趙景深氏[8]を初めとして、數多くの先學によって示されており、枚擧にいとまがないほどである。もちろん湯顯祖の創作理念が情を基調とするものである以上、杜麗娘を中心としたこのような見解は正しいであろう。

ところが、もう一人の主人公である柳夢梅については、愚直で無分別な人物であり、杜麗娘に從屬した役割しか果たしていないという程度にしか考えられてこなかった[9]。しかしながら柳夢梅像の形質は、湯顯祖の何がしかの創意が投影されているからこそ、如上の變容を遂げたものと考えられる。すなわち、『還魂記』がたとえ遊藝のジャンルに屬する戲曲という形態の作品であるとしても、柳夢梅の形象については、作者湯顯祖の人生を抜きにしては、決して語り得ぬ問題なので

ある。

以上の觀點から、本論は、これまで必ずしも充分な檢討が加えられてきたとは言い難い柳夢梅像に視座を据えて、湯顯祖がいかなる趣意を投影して彼を形象化しているのかを考察し、併せて湯顯祖の『還魂記』執筆の意圖を探ろうとするものである。

二

一般的に南戲では、作者が讀書人であることから、戲曲中においても讀書人的な色彩を濃厚に反映し、歷史上の實在人物を主人公に据えるという傾向がある。例えば、南戲の祖とでもいうべき高明の『琵琶記』が後漢の蔡邕とその妻趙五娘を、崑山派の梁辰魚の『浣沙記』が西施と范蠡を、また湯顯祖と親交のあった屠隆の『彩毫記』が李白を主人公とするがごときはその良い例である。

『還魂記』において歷史上の著名人にゆかりのある人物、すなわち杜甫や柳宗元の子孫を主人公に据えたのも、こうした南戲の傳統に立ってのものであると考えることはもちろん可能である。岩城秀夫氏は、『還魂記』の登場人物の家柄について、柳夢梅と杜麗娘をそれぞれ柳宗元と杜甫の子孫に仕立てあげることによって、時代の下る讀者觀客にとって身近なものを感じさせる効果をあげており、しかも家柄の點でも平凡でない、という主旨の見解を示されている。[10] 明代に盛行した南戲に共通する創作技法を概括的に捉え、そこから『還魂記』の登場人物の設定について論ずるならば、これは妥當な意見といえよう。しかし、湯顯祖という一人の劇作家の手に成る、『還魂記』という作品に限定して考えるとき、その主人公柳夢梅の家柄の設定に關しては、必ずしも南戲の常套的な手法に倣ったとだけは看做し得ない。なぜならそこには、柳夢梅が柳宗元の後裔でなければならなかった、湯顯祖自身に關わる、いわば必然的な要因を指摘することができるからである。

そして、その要因とは、柳宗元には南方に流されたという史實があり、湯顯祖もまた南方に流謫の憂き目を見たという共通點があるということである。

柳宗元は大曆八年（七七三）、長安に生まれ、貞元九年（七九三）、二十一歲にして進士に合格、更に貞元十四年（七九八）には博學宏詞科に合格した。貞元十九年（八〇三）、監察御史裏行に任官すると、腐敗した朝政刷新を圖る王叔文の一黨に從うようになる。貞元二十一年（八〇五）、德宗が崩じ、王叔文の仰ぐ東宮李誦が順宗と稱して卽位、柳宗元も禮部員外郎に陞任する。順宗は前年患った風疾のため失語症に罹っていたので、實質的な政事は王叔文が掌握し、宦官權力の抑制と、藩鎭に對する制御權の恢復を重要な目標とする改革を遂行してゆく。[11] ところが、その政策があまりに急進的であったがため、逆に反擊を蒙り、加えて王叔文と韋執誼との閒に仲違いが生じたため、改革は失敗に終わる。同年八月五日、攝政李寧に帝位が讓られると同時に王叔文は失脚し、渝州の司戶に配流され、一黨に荷擔した人々もそれぞれ遠謫に處された。柳宗元はといえば、九月十三日、湖南邵州刺史への貶謫という詔勅が下され、邵州へ赴く途中の十一月、再び永州司馬に貶された。永州で約九年を過ごした元和十年（八一五）、一旦長安に召還されるものの、すぐに柳州刺史に任ぜられ、元和十四年（八一九）、柳州で死沒した。

一方、湯顯祖は嘉靖二十九年（一五五〇）、江西撫州府臨川縣に生まれた。隆慶四年（一五七〇）には二十一歲で鄕試に合格するが、つづく

二度の會試には落第した。更にこれにつづく會試では、時の宰相張居正による不當な介入のため二度にわたって落第するという苦難を強いられたのである。[12] その後、萬曆十年（一五八二）に張居正が病沒し、翌萬曆十一年（一五八三）、三十四歳にしてようやく進士に合格、禮部の觀政として北京に住んだ。萬曆十二年（一五八四）には南京太常寺博士に、萬曆十六年（一五八八）には南京詹事府主簿に、その翌年には南京禮部祠祭司主事に陞進した。ところが萬曆十九年（一五九一）、以後の湯顯祖の運命を變える大事件が生起する。すなわちこの年の閏三月、彗星が現われたのを機に、神宗は言官の欺蔽を問責して停俸一年の詔勅を下し、廣く直諫を求めた。湯顯祖は邸報所載の聖諭を見て、「論輔臣科臣疏」（『玉茗堂全集』・文・十六）を上呈する。首輔申時行、吏科都給事中楊文舉、禮科都給事胡汝寧らが私門を跋扈させ、富貴を圖っているとして、これら姦佞の臣を彈劾したのである。しかしながらこの劾奏は、輔臣科臣の更迭ではなく、却って湯顯祖自身の廣東雷州府徐聞縣典史への降調という形で決着を見る。流謫されることになった湯顯祖は、一旦故郷の臨川に歸り、九月になって出立、謫地徐聞に到着したのは十一月であった。徐聞で約一年四ヵ月を過ごした萬曆二十一年（一五九三）三月、浙江處州府遂昌知縣に量移されるが、萬曆二十六年（一五九八）、上計のため北京に赴いた折、吏部に辭表を提出し、臨川に退隱した。棄官の理由は、官界の腐敗、特に礦税の弊害を坐視するに耐えなかったためとされる。[13] その後、萬曆四十四年（一六一六）、六十七年の生涯を終えるまでを臨川で送った。

以上の兩者の略傳記からも明らかなように、柳宗元にせよ、湯顯祖にせよ、南方への流謫は、政治的な確執に起因するものである。湯顯祖の場合は佞臣を彈劾したところが、逆に流謫という結果を招來したのであり、柳宗元は自らが參畫する政治改革の失敗に連座して、改革反對派から謫されたのである。兩者には流謫されるに至る情況に相違はあるものの、いずれも腐敗した官界の淨化を目途したのに對して、寃罪ともいうべき不當な處斷を蒙っての流謫であるという共通點を有する。

然り、湯顯祖は、所期の目的に思いもかけない處斷が下されて、南方流謫という自分と同じ命運をたどった柳宗元に思いを馳せ、その境遇に深い共感を抱いていたように思われる。それは次の一文からも窺い知ることができる。

唐の柳子厚は、天下の才俊賢人なり。王叔文は世の所謂狂劣無底の者なり。呂に非ず葛に非ざれども、庸衆の人之れを知る。柳子は天下の書を讀みて、堯・舜の業を懷ふ。豈に其の識此れに及ばざらん。（中略）蓋し子厚は所謂大人にして其の功を速やかにせんと欲する耳。天下の士も亦た安んぞ成敗を以て論ず可けんや。嗟夫、子厚已んぬるかな。友は韓退之に若くは莫し。退之は子厚の死を序べて、但だ其の易播の一事を記すのみ。其の用世の志を委曲するに至っては、一言も發揮することを爲さず。意へらく退之も亦た猶人の見ならんか。（「明故朝列大夫國子監祭酒劉公墓表」、『玉茗堂全集』・文・十四）[14]

從來の柳宗元評價は、韓愈が「柳子厚墓誌銘」（『韓昌黎集』卷二十三）のなかで、「子厚前時少かりし年、人と爲り勇なり。自ら貴重顧藉せず、功業立ちどころに就る可しと謂へり。故に坐して廢退せらる」[15]と論評して以降、概して否定的な立場をとるものが多い。『舊唐書』卷一六〇の劉禹錫・柳宗元傳に附された評價、[16]『新唐書』卷一六八に王叔文らとともに收められた評傳など、[17] いずれをとっても王叔文の黨に

従ったことをもって非難している。

ところが、如上の湯顯祖の一文は、これら従來の評價とは趣を異にする。初めに柳宗元の才識を高く評價し、王叔文とは全く別箇に取り扱っている。そして、功名心に驅られて王叔文の黨に連なったとして、韓愈のように安易に誹謗するのではなく、堯・舜のごとき治世の實現を希求した大人なればこそ功業を急いだのであり、その結果だけから論斷すべきではないと言って、柳宗先に同情を示している。更に柳宗元には韓愈にまさる友人はないが、墓誌銘では老母を抱えた劉禹錫に代わって播州への改貶を願い出たことのみを賞讃して、朝政に寄與しようとしたその志には一言も費していないとして、韓愈の見解に論駁を加えているのである。

ちなみにこの墓表は、劉應秋の死を悼んで書かれたものであるが、劉應秋は顧憲成や王弘陽とともに、湯顯祖の遂昌量移に盡力した人物でもある。[18] このように、湯顯祖が自らのために力を盡くしてくれた友人の墓表において、同じ命運をたどった柳宗元をことさらに取り上げ、従來の評價に反した肯定的な見解を敢えて示しているのは、自らが體驗した徐聞への流謫が全く不當なものであったことを、柳宗元の場合に重ね合わせて言明したものと思われ、甚だ象徴的である。

周知のごとく、柳宗元は唐宋八家文の一人として、後世にその文學が傳えられてきた。一方、湯顯祖は、古文辭派全盛の時代にあって、反古文辭の立場を主張し、公安派の先蹤をなす人物として知られる。すでに指摘されるように、[19] 湯顯祖の古文辭排擊は、

文は韓・蘇・歐・柳に比し、行ひは稷・契・皐・夔を追はん。[20]

と、書齋の堂上に題していたと言われる父親湯尙賢の學風を繼承してのものである。湯顯祖はそうした父親の影響を受けて、當然中唐の古文家柳宗元には親炙していたはずであり、しかもほぼ同質の原因で遠謫の辛酸を嘗めたことから、より一層の親近の情を深めていたと思われる。

ともあれ、かく政治的な確執から嶺南に流謫されたという共通點をもつことから、湯顯祖は自らの不遇を柳宗元のそれと同一化し、柳宗元の形軀の中に自らの姿を見出していたのではないか。湯顯祖のこのような心情は、『還魂記』の執筆に當たり、主人公柳夢梅を、自らと同じ命運をたどった柳宗元の後裔に擬定し、その柳夢梅に、流謫當時の自らの境遇を抽象化し、投影することによって、あたかも自分自身のように形象化するというかたちで如實に反映されている。言い換えるならば、『還魂記』における柳夢梅像は、湯顯祖の心情の代辯者のごとき役割を擔って造形されているのである。

三

『還魂記』第六齣「悵眺」は、柳夢梅が韓愈の子孫で昌黎祠の祭祀を司る韓子才の許を訪れて、落魄した身を歎く場面である。

假如俺和你論如常、難道便應這等寒落。因何俺公公造下一篇「乞巧文」、到俺二十八代玄孫、再不曾乞得一些巧來。便是你公公立意做下「送窮文」、到老兄二十幾輩了、還不曾送的箇窮去。算來都則爲時運二字所虧。

もし私と君が常日頃のことを論ずるならば、こんなにまで落魄するとは思われぬのですが。私の先祖が「乞巧文」を書いたのに、二十八代目の子孫になっても、わずかの幸運さえも得られませんし、君のご先祖さまが意を決して「送窮文」をお書きになったのに、二十幾代目かの君になっても、貧乏神を追い出せないでいま

す。推し量ってみるに、すべて時運の二字が缺けているからです。

柳夢梅のこの白は、そのまま湯顯祖の歎息に置き換えることができる。例えば、湯顯祖が徐聞に赴任する前、臨川に留まっていた時の「伯父秋園晩宴有述四十韻」詩（『玉茗堂全集』・詩・十一）に、流謫という不可避の現實に直面しての苦惱・煩悶を次のように吐露する部分がある。

謫遷方渺渺　謫遷　渺渺たるに方ひ
抗疏失區區　抗疏　區區たるに失す
大火奔長路　大火　長路を奔り
中寒臥薄軀　中寒　薄軀を臥す
病呼天比語[21]　病んでは天比の語を呼ばはり
滯泣海南圖　滯っては海南の圖に泣く
數過憐猶子　數〻過ぎりて猶子を憐れみ
深慈爲友于　深く慈んで友于と爲す
良醫疸略起　良醫は疸　略ぼ起やさしめ
君子瘧何惧　君子は瘧　何ぞ惧にせん
擬作三生度　三生を度るに擬へ作し
驚看萬死蘇　萬死の蘇るに驚き看る
低垂爭末路　低垂して末路を爭ひ
潦倒送窮途　潦倒して窮途を送らん

湯顯祖は、官界肅正の期待を裏切られて、雷州半島の南端徐聞への流謫という憂き目を見た上に、マラリアにも苦しめられ、まことに時運の缺如を痛感したことであろう。事實、この詩には、天の庇護を求めても適わず、かつて海南島に流された蘇軾と同じ命運を、やがて自らもたどらねばならないという湯顯祖の悲痛な思いが滲み出ている。

『還魂記』中の柳夢梅は、受驗を志す讀書人であり、嶺南での落魄した生活を、男子終局の場では無いとして、韓子才の薦めにより、廣州香山嶼多寶寺において、欽差識寶使苗舜賓の知遇を得て廣東を後にする（第二十一齣「謁遇」）。ちなみに「香嶼逢賈胡」詩（『玉茗堂全集』・詩・十四）などから類推すれば、湯顯祖は徐聞へ赴く途中、香山嶼（今の澳門）にも立ち寄ったようであり、この場面はその時の經驗に基づいたものと思われる。

つづく第二十二齣「旅寄」に至って、柳夢梅は廣東を離れて、江西の南安に到着するのである。

〃香山嶼裏打包來、
　三水船兒到岸開。
　要寄鄉心値寒歲、
　嶺南南上半枝梅。〃

我柳夢梅、秋風拜別中郎、因循親友辭餞。離船過嶺、早是暮冬。不隄防嶺北風嚴、感了寒疾、又無掃興而回之理。一天風雪、望見南安。

〃香山嶼より包を負ふて來り、
　三水の船　岸に到りて開く
　鄉心を寄せんと要して寒歲に値ふ、
　嶺南より南上す半枝の梅。〃

この柳夢梅は、秋風の中を苗中郎殿に別れ、親戚知友からも餞別をうけた。船を下りて梅嶺を越えると、季節は早くも暮冬。嶺北の嚴しい風から身を守るすべもなく、風邪をひいてしまった。しかし興が醒めたからといって引き返すというわけにはゆかない。

あたり一面吹雪いているが、あれに見えるのが南安であろう。

このように、『還魂記』における柳夢梅は、苗舜賓の恩惠を受けて廣東を離れ、梅嶺を越えて、嶺北の南安に到着したと描かれている。ところが、作者の湯顯祖自身は、梅嶺を越え、廣州を經由して、謫地へと向かったのであり、柳夢梅とは逆方向の路程を歩んだのである。ここで、柳夢梅と湯顯祖の兩者に共通し、しかも兩者の命運を分かつ、とりわけ重要な場所が梅嶺である。すなわち、柳夢梅は梅嶺を越えて北上することによって幸福へと導かれ、一方、湯顯祖は梅嶺を越えて南下することによって、いよいよ謫地に足を踏み入れることになるのである。

梅嶺は江西と廣東の境に位置しており、故郷の江西を離れて謫地徐聞へ赴く湯顯祖が、流謫の悲哀を一層深めた場所である。「廣南聞鴈」詩（『玉茗堂全集』・詩・十四）には言う。

傳道衡陽有鴈迴　傳へて道ふ　衡陽に鴈の迴る有りと
炎州片影更飛來　炎州の片影　更に飛來す
似憐遷客思歸苦　憐れむが似し　遷客の思歸苦（はなはだ）しきを
爲帶鄉心過嶺梅　爲に鄉心を帶びて嶺梅を過ぎる

ここには、衡陽の迴鴈峯を越え、遙か炎瘴の地に飛來した鴈に憐れまれるかのように、梅嶺を更に南下して謫地へと赴く湯顯祖の悲哀がよく傳えられている。

ちなみに柳宗元には、元和十年（八一五）、永州から長安に召還される途中、衡陽の南の衡山を過ぎり、梅の開花を目にして、長安に歸ることのできる喜びを北へ還る鴈に擬し、弟柳宗直に寄せた「過衡山見新花開却寄弟」詩（『柳河東集』卷四十二）がある。

故國名園久別離　故國の名園　久しく別離す
今朝楚樹發南枝　今朝楚樹　南枝發く
晴天歸路好相逐　晴天歸路　好し相ひ逐はん
正是峯前迴鴈時　正に是れ峯前迴鴈の時

湯顯祖は、遙か梅嶺にまで飛び來った鴈を目にして、北へ還る鴈を追うかのように長安に歸る柳宗元の姿を想い起こしたのではなかろうか。『還魂記』における柳夢梅の北上は、梅嶺で想起したこの柳宗元の北還に重ね合わせて構想されたと考えることも、或いは可能であろう。

以上、廣州を旅立ち、香山嶼で苗舜賓の知遇を得、梅嶺を越えて南安に至るまでの柳夢梅の足跡は、全て湯顯祖獨自の創出にかかるものであり、話本における柳夢梅が、父親に附き隨って南雄に來たという設定は、完全に書き改められているのである。すなわち、柳夢梅を廣東の出身ということにし、舞臺を廣東の南雄から江西の南安に改めたのは、いずれも彼の梅嶺越えを描くためなのである。しかも、自らが謫地徐聞に至った經路を、柳夢梅が溯上するように描いているのは、二人の對照的な命運を描き出すための布石であり、極めて恣意的な改變と言うことができよう。[22]

これに對して、『還魂記』のもう一人の主人公である杜麗娘はどのように描かれているのか、少しく觸れておきたい。

深窓の令孃杜麗娘は、父親杜寶の命に從い、家庭教師陳最良に「關雎」の講義を受ける。ところが、「窈窕たる淑女は、君子の好逑」とあるのを讀んで春情を傷め、消遣のために侍女春香とともに花園に遊ぶ。花園の中の亭でまどろむと、夢の中に一書生が柳の枝をもって現われ、牡丹亭畔の芍藥欄のそばで契りを結ぶ。夢から醒めて後、夢に見た書生を忘れることができず再び花園に足を運ぶ。しかし現實にそ

の書生に會面するすべは無く、日々に思慕の念をつのらせる。やがて寢れ果てた自分の姿に驚いて、自らの繪姿を描き、夢に見た書生が柳枝を贈ってくれたから、夫たるべき人の姓は柳ではあるまいかと考え、圖上に詩を題する。その後、杜麗娘の病はいよいよ重くなり、花園の梅樹の下に葬ってほしいと言い遺して息絶える。兩親は娘の遺言に從い、梅花菴觀を建てて靈位を祀る。折しも聖旨が下され、杜寶は淮揚の安撫使に陞進し、南安を後にする。

このように、湯顯祖の描く杜麗娘像は、彼女が由緒ある家柄の娘であり、舞臺が江西の南安であることを除いて、ほとんど話本をそのまま襲用したものである。

さて『還魂記』では、病に倒れて梅花菴觀に靜養する柳夢梅は、花園を散策するうちに杜麗娘の描き殘した自畫像を見つけ、彼女が題した詩を讀んでその詩句を訝る。次に掲げた曲では、柳夢梅の命運が、梅嶺越えを契機に新たな局面を迎えることを暗に示している（第二十六齣「玩眞」）。

何言「不在梅邊在柳邊」。奇哉怪事哩。

【集賢賓】望關山梅嶺天一抹、怎知俺柳夢梅過。「得傍蟾宮」知怎麼。待喜呵、端詳停和、俺姓名兒直麼費嫦娥定奪。打麼訶、敢則是夢魂中眞箇。

どうして「梅邊に在らずんば柳邊に在らん」と言っているのだろう。不思議だ。

見霽かす、かなたの關山、梅嶺のかた。いかで知らんや、この柳夢梅の過ぎりしを。「蟾宮に傍ふを得ん」とは、何を知りてぞ。さても喜ばんか、詳らかに見るに、わが姓名のいかで嫦娥に奪はれたる。思ひ遣るに、夢の中の眞實ならん。

かくて、畫像の美女に心を奪われた柳夢梅の前に、杜麗娘の亡魂が現われて、毎夜のように逢瀨を重ねるのである（第二十八齣「幽媾」）。

以上のように、杜麗娘の描寫については、話本とは大きな異同が無いのに對して、杜麗娘と會面するに至るまでの柳夢梅像は、湯顯祖が新たに創出したものであり、話本とは樣相を一新している。とりわけ、謫地での自分自身と同じ境遇に置いた柳夢梅が、梅嶺を北上することによって不遇な情況から脫してゆくという描寫は、あたかも湯顯祖の境遇を超克するかのようであり、『還魂記』の執筆に當たって、湯顯祖が最も意を盡くした改變であると言うことができる。

四

發墓から團圓に至るまでの描寫は、話本と『還魂記』とでは著しく異なっている。

まず話本では大要次のごとくである。

柳夢梅は杜麗娘に自分が死んだ事情を打ち明けられ、更に墓を發いて再生させてほしいと懇願されて、その不氣味さに慄然とし、次の日に早速このことを兩親に話す。父親の柳思恩が役所の者に眞僞を確かめてみると、果たして前知府杜寶の娘杜麗娘が花園に埋葬されているとのこと。そこで梅の樹の下を掘り返してみると棺が現われ、中には生けるがごとき美女が横たわっていた。その美女を密室に移して介抱すると蘇生したので、吉日を擇んで二人の婚姻を華やかに執り行った。一方、江西省參知政事の杜寶は、柳思恩から杜麗娘の蘇生、柳夢梅との成親を知らせる手紙を受け取り、臨安で二人に會いたいとの返事を書き送った。翌年、柳夢梅は應擧して進士に合格し、臨安府推官に除せられる。この年、任期が滿ちて臨安に歸って來た柳思恩夫婦、

その二ヵ月後、臨安に戻った杜寶夫婦、それに柳夢梅、杜麗娘が一堂に會して、喜びに浸る。その後、柳夢梅は臨安府尹に陞進し、杜麗娘は二子を儲けて、それぞれ顯官となった。

このように、話本における杜麗娘還魂以降の情節は、ややもすれば單調であり、柳夢梅と杜麗娘の二人は、雙方の兩親の祝福を受けて結ばれ、物語は何ら波瀾曲折を經ることなく終局へと導かれる。これはこの話本がそもそもは冥魂譚であり、專ら杜麗娘の慕色と還魂を中心に敍述が進められているためである。

一方、『還魂記』では、柳夢梅が幾多の困難を克服してゆくことによって終局へ導かれるという構成をとっており、甚だ起伏に富んだ展開がなされる。以下、齣を追いつつ柳夢梅の足跡をたどってゆくことにする。

第三十二齣「冥誓」では、杜麗娘が柳夢梅とこの世で夫婦の緣を結びたい一心から、自分は前太守杜寶の娘で、畫像の中の美女であること、そして今は亡魂となって姿を現わしていることを明かし、墓を掘り返して蘇らせてほしいと懇請する。

第三十三齣「秘議」は、柳夢梅が梅花菴觀の菴主石道姑に協力を求め、第三十四齣「訓藥」は、石道姑が陳最良の藥店で回生の妙藥を買って準備を整える場面である。

そして第三十五齣「回生」において、石道姑の甥疙童が墓を掘り、杜麗娘を牡丹亭に移して還魂丹を飲ませ、蘇生させるのである。

つづく第三十六齣「婚走」では、陳最良から杜麗娘の墓參に誘われ、一同は狼狽する。

(淨) 怎了、怎了。陳先生明日要上小姐墳去。事露之時、一來小姐有妖冶之名、二來公相無閨閫之敎、三來秀才坐迷惑之譏、四來老身招發掘之罪。如何是了。(旦) 老姑姑、待怎生好。(淨) 小姐、這柳秀才待往臨安取應。不如曲成親事、叫童兒尋隻贛船、貪夜開去、以滅其蹤。意下何如。(旦) 這也罷了。

石道姑：どうしましょう、どうしましょう。陳先生が明日お嬢さまのお墓に參ろうとおっしゃる。事が露顯したら、一つには、お嬢さまが妖鬼の汚名をきせられるし、二つには、太守さまには子女の敎育が無いことになるし、三つには、柳さまが誘惑の譏りをうけられるし、四つには、わたしが發墓の罪を認めなければなりません。どうしたものでしょうか。

杜麗娘：道姑さん、どうしたら良いでしょうか。

石道姑：お嬢さま、柳さまは臨安へ試驗を受けに行こうとしておられます。ここは曲げて結婚され、小僧に贛江を行く船を探させて、眞夜中に出帆し行方をくらませるのが得策でしょう。いかがですか。

杜麗娘：それもしかたがないわね。

かくて石道姑の提案で、柳夢梅と杜麗娘は臨安へと船出するのである。

第三十九齣「如杭」は、すでに臨安での場面である。一旅店に宿をとったところに、石道姑から試驗が始められていることが知らされて柳夢梅はあわてて試驗場に出向く。

第四十一齣「耽試」は、柳夢梅が試驗の期日に遲れ、悲觀して自殺しようとする場面に始まる。しかし試驗官は、かつて香山嶼で知遇を得た苗舜賓であり、どうにか受驗を許可される。そこへ金軍の入寇が傳えられ、合格發表は延期となる。

第四十四齣「急難」は、淮揚地方の戰況を聞き及んで兩親の身を案

じた杜麗娘が、消息を調べてほしいと頼む。そこで柳夢梅は、杜麗娘の再生の證據として、畫像を手に、揚州へと旅立つ。

第四十九齣「淮泊」では、柳夢梅は揚州に到着したものの、杜寶はすでに淮安に鎮臺を移した後で（第四十二齣「移鎮」）、賊の包圍も解かれ（第四十七齣「圍釋」）、次の日には淮安で太平宴が開かれることになっていた。

第五十齣「鬧宴」以降は、柳夢梅にとって最大の苦難である。太平宴のさなか、襤褸を纏った柳夢梅が登場し、杜寶の娘婿と名乗って再三拜謁を請う。しかしみすぼらしい身なりのため信用されず、逆に詐稱と疑われて捕縛され、臨安へ護送されるのである。

第五十三齣「硬拷」は、柳夢梅が拷問にかけられる場面である。杜寶は柳夢梅を引き出し尋問を始めるが、彼の持物の中に娘の畫像があるのを見て墓泥棒と思い拷問を加える。

（生）你這樣女婿、眠書雪案、立榜雲霄、自家行止用不盡、定要秋風老大人。（外）還强嘴。搜他裹袱裏、定有假雕書印、併贓拿賊。（丑開袱介）破布單一條、觀音畫一幅。（外看畫驚介）呀、見贓了。這是我女孩兒春容。你可到南安、認的石道姑麼。（生）認的。（外）認的箇陳教授麼。（生）認的。（外）天眼恢恢、原來劫墳賊便是你。左右采打下。

柳夢梅：この娘婿は日夜螢雪の功を積み、雲霄なる高榜に名を擧げんとするもの。わが能力には充分に餘力があるのに、どうして閣下にたかったりいたしましょうか。

杜寶：まだ戯言を口にしおる。包みの中を調べてみい。きっと僞造の印があるはずじゃ。贓品もろとも盗賊を捕えてやる。

獄卒：〔包みを開くこなし〕破れた掛布團のカバーと、觀音さまの畫像がございます。

杜寶：〔畫像を見て驚くこなし〕やや、贓品がでてきたぞ。これはわが娘の畫像。その方、南安に參ったであろう。石道姑を知っておるか。

柳夢梅：知っております。

杜寶：陳教授を知っておるか。

柳夢梅：知っております。

杜寶：「天網恢恢、疎にして漏らさず」とはこのことじゃ。さても墓を發いた賊はその方であったな。ものども、取りおさえて打て。

柳夢梅は杜麗娘蘇生の次第を告げて抗論するが、杜寶は一向に聞き入れようとせず、吊し上げて打ちすえる。そこに苗舜賓が現われて、柳夢梅の狀元及第を傳え、助けようとするが、杜寶はそれすらも信用しない。

第五十五齣「圓駕」では、皇帝の前で柳夢梅と杜寶の二人が對質する。二人が應酬を交わしているところに、すでに母親と再會していた杜麗娘（第四十八齣「遇母」）が登場して、皇帝に蘇生するに至る經緯を奏上する。杜寶は亡魂だと極めつけるが、皇帝は杜麗娘の蘇生に僞り無しとの裁可を下す。かくて二人の結婚は認められ、柳夢梅は翰林院學士に除せられ、杜麗娘は陽和縣君の封號を授かって團圓するのである。

このように、『還魂記』において、南安で杜麗娘を蘇生させてからの柳夢梅の足跡はまず發墓の露顯を恐れ、應擧という本來の目的を果たすために船で臨安に行ったとされている。ついで杜麗娘の兩親の安危を尋ね、加えて結婚の承認を得るために揚州に行き、更に淮安に足

を伸ばし、杜寶に捕えられて臨安に戻る。そして臨安で團圓を迎えるのである。

この柳夢梅のたどった經路は、やはり徐聞へ流謫される途中の湯顯祖の路程にほぼ合致する。

先に觸れたように、南京禮部祠祭司主事の職にあった湯顯祖は、萬曆十九年（一五九一）五月に降調の聖旨を受けた。南京を發して臨川に歸る途中、一旦杭州に立ち寄ったことは、「謫尉過錢塘、得姜守冲『寘方太守詩』、悽然成韻」詩（『玉茗堂全集』・詩・十一）によって知ることができる。その後、マラリアに苦しめられて、しばらく臨川に留まったが、『哀偉朋賦』（『玉茗堂全集』・賦・五）に「九日予を盱眙に登らせ、十月予を湞陽に遷らしむ」[23]と記すところに從えば、九月九日に盱眙に行き、それから徐聞へ出立したものと思われる。更に贛州の鬱孤臺を經由し（「鬱孤臺留別黃郡公鍾梅、明李本寧參知引病竝懷」詩、『玉茗堂全集』・詩・三）、梅嶺に向かったようである。

前章で述べた梅嶺越えのように明確なものではないにせよ、ここでも柳夢梅は湯顯祖の路程、命運ともに溯上するかのように描かれている。すなわち、杭州や贛州が湯顯祖にとっていわば流謫の途次であるのに對して、柳夢梅にとって贛水は榮達への第一歩であり、杭州（臨安）は杜麗娘との結婚を認められると同時に、まさに榮達を贏ち得た場所なのである（末尾附載の略圖參照）。

以上のごとく、『還魂記』における柳夢梅は、その路程、命運ともに湯顯祖とは逆方向に向かうように設定されている。とりわけ梅嶺は、兩者の命運を分かつ最も重要な接點であり、『還魂記』の結末が、柳夢梅の梅嶺北上という一事によって支配されていることは言うまでもない。この梅嶺はいにしえより梅の名所として知られるが、終幕において、杜麗娘は自らの命運を梅の花になぞらえて、次のように唱う。

【北尾】……虧殺你南枝挨暖俺北枝花。則普天下做鬼的有情誰似咱。

……南枝の君のおかげにて、北枝の花は暖を受く。あまねく天下に、幽魂の情ある者、誰か我に似ん。

南枝が北枝を暖めたとは、もとより嶺南の柳夢梅が梅嶺を越えたことによって嶺北の杜麗娘を蘇らせたことを意味している。

以上を要するに、湯顯祖の手で新たに造形された柳夢梅は、梅嶺を更に北上して榮達を手中に收めるように描かれることによって、梅嶺を南下して苦難を強いられた作者自身の境遇を超克するかのように形象化されているのである。だとすれば、かくのごとく描出された柳夢梅像には、廣東、しかも雷州半島の南端徐聞という炎瘴の地への流謫によって、湯顯祖にもたらされた地理的、心理的な苦境からの解放が寄託されていると考えることができるであろう。

五

湯顯祖は『還魂記』の題詞において、生死を超越した情の發露にこそ、眞の人間の姿が表徵されると說いている。この言說に從って『還魂記』にアプローチするならば、やはり杜麗娘を中心に据えなければなるまい。『還魂記』の實演に接した觀客も、杜麗娘が夢に見た青年を戀い慕って息絶え、その青年の手によって蘇り結ばれる、という劇情に魅了されたことであろう。婁江の俞二娘がこの劇を耽讀して死に至ったという逸話[24]や、杭州の女伶商小玲がこの劇に心醉して演じつつ殉じたという話[25]などは、『還魂記』がいかに解釋されてきたかを如實

に物語っている。

その杜麗娘に關して湯顯祖は、柳夢梅を柳宗元の子孫と定めたように、杜甫の後裔を父親に、甄皇后の後裔を母親にもつ、由緒ある家柄の娘と設定している。例えば、父親杜寶が嫡男をもたぬことを歎く場面（第三齣「訓女」[26]）、李全討伐の鎭臺を移すため、杜寶が甄氏と別離する場面（第四十二齣「移鎭」[27]）において、それぞれ杜寶を杜甫に比擬しており、その娘杜麗娘が家學『詩經』を學ぶ場面（第五齣「延師」[28]）においても、杜甫の子孫であることが意識されている。このように家柄の平凡でないことが、さまざまのかたちで描かれてはいるものの、杜氏親子の人物像には、柳宗元の子孫柳夢梅に、湯顯祖の心情が形質ともに寄託されていたような、作者との接點は見出せない。湯顯祖は、杜麗娘については、專ら有情の人として、生死を超越した情を結實させることに意を灌いで形象化したのであり、その家柄は單に柳夢梅に對應させたものでしかないのである。

このように見てくると、『還魂記』の二人の主人公は、全く異なった角度からの形象化が圖られており、從來とかく閑却されがちであった柳夢梅も、杜麗娘に從屬する副次的な存在では決してなく、かなり恣意的に造形されていることは明白である。なかでも、柳夢梅像の祖型が、流謫という湯顯祖の個人史のなかの苦難の一時期をモチーフにしていることは、看過できない事柄である。

湯顯祖にとって、徐聞への流謫がいかに苦痛であったか、浙江南部の山閒に位置する僻陋の地遂昌に量移されてすらも、「弟の量移の如きは、殊に多幸と爲す」[29]（「答李宗誠」、『玉茗堂全集』・尺牘・一）と言い、「雷陽より歸り、此の縣に憩ふを得たり」[30]（「答吳四明」、『玉茗堂全集』・尺牘・二）と言っていることからも充分に推察できよう。

こうしたことからも、『還魂記』における、柳夢梅が廣州を旅立ち、臨安で榮達するという描寫が、湯顯祖の徐聞に至る流謫の旅を基盤にしており、しかも柳夢梅像に、湯顯祖自身が流謫の苦惱から解放されんことを希求する心情を寄託していると見ることは、充分に可能である。

湯顯祖は萬曆二十六年（一五九八）に棄官して、故郷の臨川に閒居したが、『還魂記』もこれに相前後して脫稿されている。棄官の理由は、すでに述べたとおり、直接には礦稅による吏民の疲弊に心を傷めたためであるが、これはまた、全ての權力が佞臣に掌握され、腐敗しきった官界に對する反撥によるものでもあろう。更に棄官に至るまでの湯顯祖の境遇に目を向けるならば、輔臣科臣を彈劾した上疏によってもたらされた悲運からの脫却を企圖したものとも考えることができる。量移された遂昌では、確かに文敎政策に力を入れ、治安にも心を碎いて、土地の吏民に慕われていた。[31] しかし心情的には、流謫以前、南京で官吏としての榮達を心に期していた時期に、及ぶべくもなかったはずである。

かかる情況を勘案すると、湯顯祖は徐聞への流謫以降の不本意な現實を、棄官という直接的な行動をとることによって超克しようとしたのみならず、『還魂記』の執筆、別して自らの分身のごとく造形した柳夢梅の姿を借りて、閒接的に超克しようともしたのである。すなわち、『還魂記』における柳夢梅は、湯顯祖が適えることのできなかった榮達への道を歩む、理想の姿として像を結んでいるのである。

注(1) 『還魂記』完成の時期については諸說がある。一つは、湯顯祖が「牡丹亭記題詞」の末尾に「萬曆戊戌」と記すところに據って、萬曆二十六

年（一五九八）に脱稿したとする徐朔方氏の説（「玉茗堂傳奇創作年代考」、『湯顯祖年譜』、中華書局、一九五八）、もう一つは、天啓三年（一六二三）の王思任の「批點玉茗堂牡丹亭敍」（『清暉閣批點牡丹亭』巻首）に「往見吾鄉文長批其巻首曰『此牛有萬夫之稟』」とあることから、徐渭は萬暦二十一年（一五九三）の死沒以前に『還魂記』を目にしていたはずであり、しかも湯顯祖とも交遊のあった臧懋循の手に成る『還魂記』改訂本などの題詞末尾に「萬暦戊子」とあることから、萬暦十六年（一五八八）には初稿が完成していたとする八木澤元氏の説（『明代劇作家研究』、講談社、一九五九、五〇七頁～五一〇頁）である。これに對して岩城秀夫氏は、萬暦二十七・八年（一五九九・一六〇〇）頃に書かれた湯顯祖の書簡「答張夢澤」（『玉茗堂全集』・尺牘・四）に「余若『牡丹魂』・『南柯夢』、繕寫而上」とあることから、萬暦二十六年以降も加筆されていた可能性を指摘されており（『中國戲曲演劇研究』、創文社、一九七三、二一四頁）、筆者も岩城氏の見解に贊同する。

(2) 岩城秀夫氏「還魂記の藍本」（『吉川博士退休記念中國文學論集』、筑摩書房、一九六八）。また注(1)『中國戲曲演劇研究』、二一五頁～二三〇頁。

(3) 內閣文庫藏。

(4) 宮內廳書陵部藏。

(5) 注(2)岩城氏論文に指摘されるほか、大塚秀高氏「明代後期における文言小説の刊行について」（『東洋文化』61、一九八一）にも、林近陽編『燕居筆記』（內閣文庫藏）と併せて、刊行の先後について詳述されている。尙、孫楷第氏『日本東京所見小説書目』には、何本と馮本を著錄し、それぞれ篇目を列記している。このうち馮本については平話か否かの區別がなされており、「杜麗娘牡丹亭還魂記」は文言小説とされている。しかしながらこの話本は、何本では白話で、馮本も文言に近い部分はあるものの基本的には白話で書かれており、孫氏の見解は妥當ではない。

(6) 『還魂記』の底本には、京都大學文學部所藏の「懷德堂本」を用いた。また譯文は、岩城秀夫氏譯（「中國古典文學大系」53『戲曲集（下）』、平凡社、一九七一）、および Cyril Birch 氏による英譯（《The PEONY PAVILION》, Indiana University Press, 1980）を參照した。

(7) 「湯顯祖和他的傳奇」（『元明清戲曲研究論文集』、一九五七、作家出版社）。

(8) 「牡丹亭」（『戲曲筆談』、一九六二、中華書局）。

(9) 管見の及んだ限りでは、柳夢梅と柳宗元、そして湯顯祖の三者の關連性について言及する唯一の論文に、侯外廬氏の「湯顯祖牡丹亭還魂記外傳」（『論湯顯祖劇作四種』、中國戲劇出版社、一九六二、所收。この論文は『人民日報』一九六一年五月三日版所載の「『牡丹亭』外傳」に修訂を施したもの）がある。侯氏は本論文において、「湯顯祖は、杜麗娘と柳夢梅の戀愛の物語を通して、歴史上の人物である杜甫や柳宗元を『還魂記』中に蘇らせており、そこには杜甫・柳宗元の境遇、思想、そして理想が下敷きにされている。これは杜甫・柳宗元の生きた時代に對する諷刺であり、同時に湯顯祖自身の生きた時代に內在する矛盾を暴露したものである。」との見解を示されている。しかしながら王季思氏が「怎樣探索湯顯祖的曲意――和侯外廬同志論『牡丹亭』」（『文學評論』一九六三年第三期。のち『玉輪軒曲論』、中華書局、一九八〇、にも收む）において反駁を加えられたように、侯氏の論文は必ずしも例證が適切ではなく、ために牽强附會のきらいがあって、にわかには首肯し難い。

(10) 注(1)『中國戲曲演劇研究』二六〇頁。

(11) 重澤俊郎氏「柳宗元に見える唐代の合理主義」（『日本中國學會報』3、一九四九）。

(12) 萬暦五年（一五七七）の會試では、張居正が次子嗣修の合格を圖って海內の名士を招聘したが、湯顯祖はこれに應ぜず下第、また萬暦八年

（一五八〇）には、三子懋修のための招致に應ぜずに下第した。

(13) 鄒迪光『臨川湯先生傳』に、「而公以倜儻夷易、不能卷韝鞠膽、睨長吏色而得其便。又以礦稅事、多所豁豁、計偕之日、便向吏部堂告歸」と言う。

(14) 唐柳子厚、天下之才俊賢人也。王叔文、世之所謂狂劣無底者也。非呂非葛、庸衆人知之。柳子讀天下之書、懷堯舜之業、豈其識不及此。……蓋子厚所謂大人欲速其功耳。天下士亦安可以成敗論也。嗟夫、子厚已矣、友莫若韓退之。退之序子厚死、但記其易播一事。至其委曲用世之志、不爲發揮一言。意退之亦猶人之見乎。

(15) 子厚前時少年、勇於爲人、不自貴重顧藉、謂功業可立就、故坐廢退。

(16) 而蹈道不謹、昵比小人、自致流離、遂隳素業（五代・劉昫）。

(17) 宗元少時嗜進、謂功業可就、既坐廢、遂不振（宋・宋祁）。

(18) 例えば「與湯若士書」（『劉大司成集』巻十四・尺牘）には、「王弘陽已任事、相知之誼甚深、相爲之意甚周。行前曾與弟私論、到任後數月即揭赴部、欲兄早離苦海」とある。

(19) 注(1)『中國戲曲演劇研究』十一頁、三十九頁。

(20) 承塘公建祠於靈芝園之右、立文會書堂於文昌門之外、堂上題云「文比韓蘇歐柳、行追稷契皐夔。」（『文昌湯氏宗譜』巻首「撫郡湯氏廨宇規模記」）。

(21) この比は庇と解し（『說文通訓定聲』履部第十二「比、……叚借爲庇」）、天比は天庇、すなわち天の庇護の意に解す。

(22) 趙景深・李平・江巨榮三氏の「關於『牡丹亭』藍本的探討」（『中國戲劇史論集』、江西人民出版社、一九八七）では、藍本と『還魂記』とを比較した上で、湯顯祖の改編した地理的な要素はさほど重要ではない、との見解を示しているが首肯できない。

(23) 九日登予于吁姥、十月遵予于湞陽。

(24) 張大復『梅花草堂集』巻七「俞娘」。

(25) 焦循『劇說』巻六に引く「磵房蛾術堂閒筆」。

(26) 「【玉山頹（前腔）】吾家杜甫、爲漂零老愧妻孥。（浪介）夫人、我比子美公公更可憐也。（唱）他還有念老夫詩句男兒、俺則有學母氏壹眉嬌女。」このうち「爲飄零老愧妻孥」は、「自閬州領妻子却赴蜀山行」詩（『杜詩詳注』巻十三）に「何日兵戈盡、飄飄愧老妻」とあるのを、「念老夫詩句男兒」は、「遣興」詩（同、巻四）に「驥子好男兒、前年學語時、問知人客姓、誦得老夫詩」とあるのを、また「學母氏壹眉嬌女」は、「北征」詩（同、巻五）に「瘦妻面復光、癡女頭自櫛。學母無不爲、曉粧隨手抹。移時施朱鉛、狼藉畫眉闊」とあるのをそれぞれふまえている。

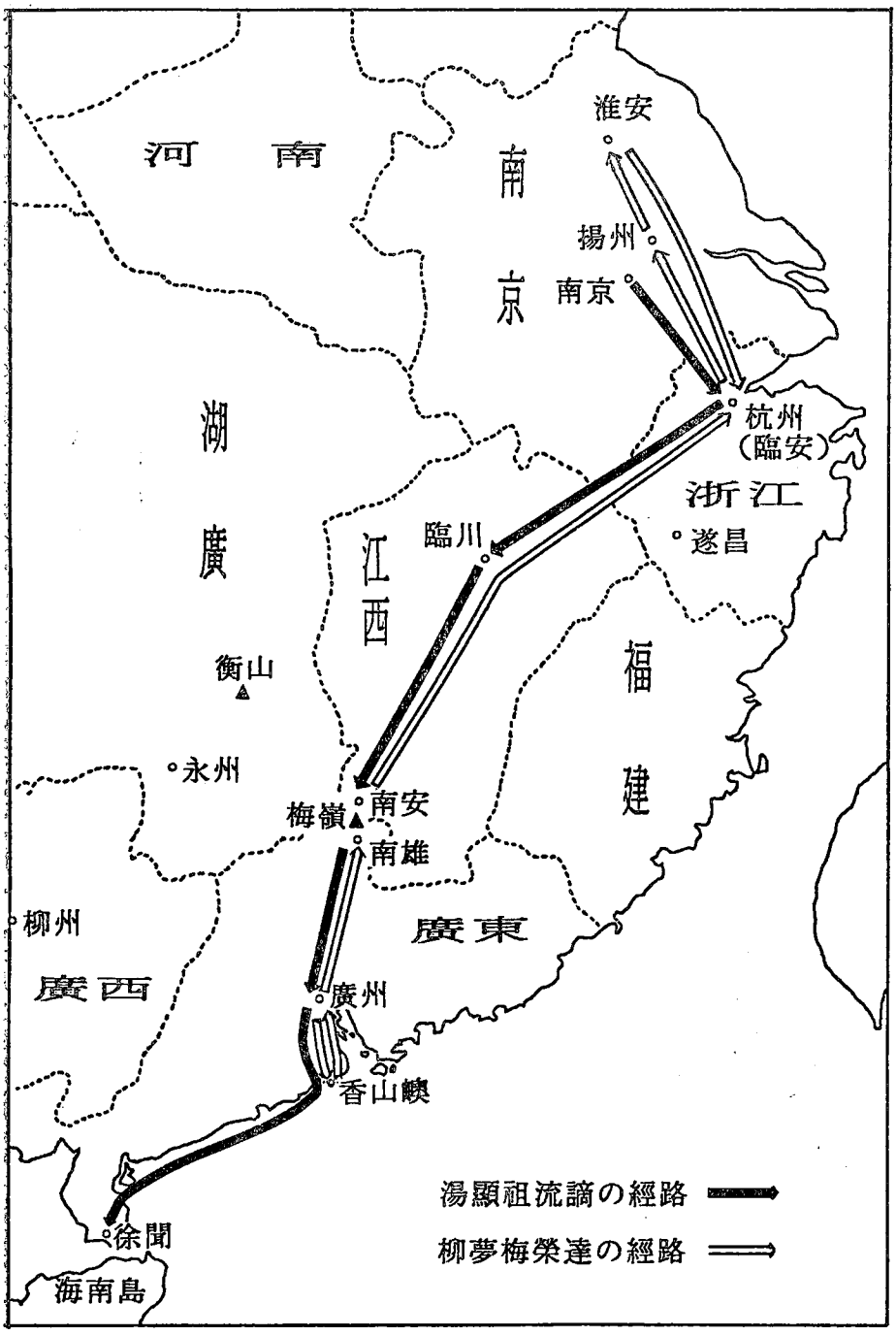
(27) 「【短拍】老影分飛、老影分飛、似參軍杜甫、把山妻泣向天隅。」ここでは乾元元年（七五八）、杜甫が華州司功參軍に左遷された時の一家の離散が意識されている。

(28) 「則『詩經』開首便是后妃之德、四箇字兒順口、且是學生家傳、習『詩』罷。」この杜寶の白は、「宗武生日」詩（『杜詩詳注』巻十七）に「詩是吾家事、人傳世上情」とあるのを承けたものである。

(29) 如弟量移、殊爲多幸。

(30) 雷陽歸、得憩此縣。

(31) 例えば「遂昌縣相圃射堂記」（『玉茗堂全集』・文・七）によれば、遂昌に着任早々、射堂を建てて吏民の敎化を圖り、「遂昌縣滅虎祠記」（『玉茗堂全集』・文・七）によれば、虎狩りを行い、滅虎祠を建てて治安の向上に努めたようである。このほか「答李舜若觀察」（『玉茗堂全集』・尺牘・二）には、「斗大平昌、一以清淨理之。去其害馬者而已。士民惟恐弟一旦遷去、害馬者又怪弟三年不遷」と記し、その善政から吏民に慕われていたことを自ら述べている。



湯顯祖と柳夢梅の路程略圖